



【体験版】 配信者の兄と弟との秘め事

野菜箱

高校学校の授業が終わり、下校準備をしている時にピコンと通知音がなった。通知音のしたスマホを確認すると、家族ラインで春兄こと兄の忠春からのメッセージだった。

『今日のご飯和食がいい、後今日は20時から配信するから、7時までには食べた』

配信活動する兄からのいつものリクエストだ、家事は私の担当になっているので、夕飯は私が作ることになっている。

私は了解の返信をして、スーパーに向かった。和食がいいとのことでは、家にあつた食材の事を思い出しながら献立を考える。

「うーん、お魚とお肉どっちがいいんだろ？ きやつ!？」

「僕は魚が食べたいな！ 夏帆姉さん！」後ろから抱き着いてきたのは、私の3つ下の弟である、楠野千秋だった。

弟の千秋は中学二年生で、勉強の成績はあまり良くないが、運動神経は良い、ただど家計の負担になるからと部活をせず、兄の配信活動を手伝っている。

「千秋！ 後ろからいきなり抱き着かないでよ！ びつくりするでしょ！」
抱き着いてきたのを押しのけようとするが、千秋はビクともしない、全くこの子は本当にもう……。

私たちの両親は3年前に事故で亡くなっている。当時小学生の千秋にとって両親の死は私たち以上に相当辛かったようで千秋は、私と兄の忠春にベツタリになった、それは千秋が中学にあがっても変わらないようだ、なんなら最近さらに悪化しているように感じる。

「えへへごめんね夏帆姉さん、それよりさつき言つてたけど何買つてくの？」
反省の色を見せずに謝りながらもまるで恋人のように腕を組んでくる千秋にため息が出そうになるが我慢して答える。

「今日の夕食のおかずだよ、春兄が和食がいいってさ、さつきと材料を買つて

帰ろうか」

そう言うと千秋は嬉しそうな顔をしながら買い物かごを持ってくれた。

「うん、荷物をは持つから♪」

買い物を終えて私たちは帰宅した。

玄関を開けると撮影部屋の方から、音が聞こえてくる。どうやら既に春兄は配信の準備を始めているらしい、私はキッチンに向かいご飯の準備を始めて、千秋は兄の配信準備を手伝うために部屋に向かった。

配信活動自体は、春兄が中学生の時くらいからやっており、その時は一人で趣味でやっていただけが、続けてやっていたおかげで収益を得れるようになった、学生ながら結構な金額を稼いでいたようだ、それからしばらく経ち両親が事故で亡くなり、当時中学生の私はこれからの生活と、家族が離れ離れになってしまいうんじやないかと不安だったが、幸いにも実家のローンは払い終わっており当時高校生だった春兄が配信で結構稼いでくれたのと、両親の遺産も合わ

せれば私と千秋の大学費用^⑧3人で生活しくらいは、余裕があるからと兄弟が離れ離れにならなかった、最近千秋も配信活動を手伝っていてそれがだいぶ好調で、『HARU&SAKIの部屋』の名前でコンビで活動している。

私はと言うと、配信活動に必要な物や家の家事、たまに動画編集の手伝いなどをして3人で持ちつ持たれずの関係を築いている。

そうこうしているうちに夕飯の準備が終わり、盛り付けてテーブルに運ぶと配信準備も終わったらしく、春兄と千秋がリビングにやってきた。

「お腹すいたー早く食べよー!」

「そうだね、食べようか」

3人そろって席に着きいただきますをする。

「いただきます」

春兄と千秋が美味しそうに食べているのを見て私も箸を進めた。

食事が終わり食器を片付けて、私と春兄は洗い物を、千秋は洗濯物を干すため

に洗濯場に行った。

洗い物があらかた終わった時ふと考えてしまった

「ねえ春兄、このまま3人仲良く暮らせるかな？」

私はふと疑問を投げかけた、私の中ではずっとこのことが気がかりになっていた、今は配信活動が好調だから3人仲良く平和に暮らせているが、3年前両親が死んでしまったように、いつこの幸せが壊れてしまうか分からない、そう思うと怖くなってしまうのだ。

そんなことを考えていると、不意に後ろから抱きしめられる、背中に柔らかい感触を感じる、振り向くとそこには優しく微笑む春兄がいた。

「大丈夫だよ、俺たちが3人一緒にいられるように努力するから、心配しないで」

そう言って頭を撫でてくれる、その優しい手つきに心が安らぐ、やっぱり春兄には敵わないなあ。

「うん、ありがとう、私頑張る！」

「よし！ それじゃあ僕は配信の準備してくるから、夏帆はテスト近いだろ？ 勉強しておくんだぞ」

「はい」

そう言い残して春兄は自分の部屋に行ってしまった。

本日の配信も好調だったらしい、チャンネル登録者数がまた増えたようで、廊下で仲良さそうな声で話しながら喜んでいる声が聞こえる。

私はというと、まだ勉強が終わってないため自室で勉強を続ける、目標のところまで終わる頃には時計の針は0時半を指しており、眠い目を擦ってお風呂に入り、ほかほかな状態で自室に戻ろうとした時、春兄の部屋から光が漏れていることに気がついた。

春兄はまだ起きているのかと思い、何をしてるか気になり部屋に入ろうとした

所で

「んっ…つく、はあはあ……」

ドア越しからでもはつきりと聞こえてくる艶めかしい吐息と喘ぎ声、私は驚きのあまりその場で立ち尽くしてしまった。

だが春兄も男の大人だ、そういう事をするのは何もおかしい事はない、私は自分に言い聞かせ離れようとした瞬間、

「なっ夏帆、っ♡…つく、あっ♡」

(え、今私の名前呼んだ?)

私は混乱した、春兄は私の名前を呼んでいた、これはマズイみなかった事にしよう、なんなら私の聞き間違いと思えば私は急いでその場から離れようとした瞬間、

ガタンッ

廊下に置いていたダンボール箱に足をぶつけてしまい音を立ててしまった、

(え、嘘、やばい！)

急いで自分の部屋に戻ろうとしたが、慌てていたため足元がおぼつかず転んでしまった、そして部屋の扉が開き、部屋着の春兄が出てきた

「夏、帆……?」

「は、春兄あの、えっと、あ！ 勉強しすぎちゃったのかな？ あはは、廊下で転けちゃったわ、私ってドジだね!! 春兄も夜更かしせず寝た方がいいよ！ つじや！ 私は寝るから！」

転けたまま勢いよく捲し立てるようにしやべり、急いで立ち上がり逃げようとするが、春兄に腕を掴まれ止められた

「な、何？ 私眠たいから、えっちよつと!!」

「……」

何も答えないまま部屋に引きずり込まれ、ベッドに仰向けの状態で押し倒された。

春兄は私の上に膝立ちの状態で馬乗りになり、無言のまま私を見下ろしてくる、黙っている訳にもいかず

「あ、あのは、春兄？ ……なにしてるの？ 明日も学校で…春兄も動画編集があるでしょ？ 早く寝ないと…」

必死に言葉を繋ぎ今の状況を切り抜けようと取り繕うが春兄は、無言のまま私を見下ろすだけ、だがその表情はいつも優しく頼れるお兄ちゃんの春兄ではなく、どこか熱を持った眼差しをしている。

「ねえ、どうしちゃったの？ 何か言つてよ…怖いよ春兄…」

私の声は震えてしまっていたが、必死に問いかけた、だが春兄は応えてくれないまま、シワが付いてる自身のズボン手を掛け、下着と一緒にズラし、下半身を露出させた。

「ちよっ！ 何して「見てろ」

私の制止の言葉を振り切り、春兄は自らのモノを上下に動かし始めた、小さい

頃は一緒にお風呂に入ったりしたが、もう私も高校生だ、自分の記憶にある小さい頃とは違う、当然成長した男性のアレを見るのは初めてだった。

春兄は段々と息遣いが荒くなり、先っぽから少し白い液体が垂れてきた、今にも破裂しそうな程パンパンになっていく。

私は、そんな状況で彼の自慰行為にどこか目が離せない自分がいることに驚いた、段々と硬くなっていくソレを見ながら、春兄の顔を見ると頬を赤らめ息が荒くなっているのが分かった、その顔はまるでどこか色つぼく、いつもの兄の面影はどこにもなかった。

「んっはあはあ……くっ」

春兄は限界が近づいてきたようで、さらに激しく自身を扱っていき、そしてドピュツドピュビュルルルービュツビュ……

果ててしまった、春兄のモノから白いものが溢れ出て、彼の手の中で収めようとしているが、私の顔と首に数滴かかった、初めて見る兄の射精に呆然として

いると、

「つはあ、はあ…夏帆、聞こえたんだろ？俺が夏帆で抜いてたの……」

「…」

あまりの情報量に茫然自失状態になっていると、春兄の左手が伸びてきて顔に触れられた、そのまま顔を近づけられキスされる直前で体を捻り、なんとか回避し一気に春兄の体を押しつけて、ベッドから起き上がり部屋を出た。

自室に戻り、頭を抱えながらベッドに座り込む、まさか優しい兄にあんなことをされるとは思わなかった。

「どうすればいいんだろ……」

私はこれからどう接していけばいいのだろうか、そもそもこんなこと誰にも相談できない、ましてや家族なのだから尚更だ。

考えれば考えるほど分からなくなる、いつそ夢ならいいのと思うが、顔についた白濁とした精液がそれを許してくれなかった。

私は悶々とした気持ちでまともに眠りにつけず朝を迎えた。

寝不足の体を引きずって、リビングに向かうと、千秋が先に起きていてキツチンに立っている、いつも朝は千秋と二人で過ごしているため、春兄に会わずに済むので少し安心するが、昨日の事が脳裏に焼きついて離れない。

「おはよ、夏帆姉さん！　姉さんが僕より遅いって珍しいね、顔色悪いしもしかして体調悪い？　今日は学校休む？」

「大丈夫だよ、心配しないで、ただちよつと寝付けなくて遅くなったただけだから、ありがとう千秋」

心配そうに見つめてくる千秋の頭を撫でると、どこか不服そうな顔をしながらも嬉しそうに微笑む。

「そう？　それじゃ朝食食べよっか！」

「うん、そうだね」

テーブルに座ろうとするが、ふと視界の端に春兄の姿が見える、一瞬体が強ばった。いつもこの時間は寝てるはずなのに……

「夏帆、千秋おはよう」

「は、春兄おはよう」

「おはよー春兄」

いつも通りを挨拶を交わすが、私は春兄の方をまともに見れず、朝ごはんを流し込み逃げるように自室に帰った。

正直学校に行きたくなかったが、流石にテスト前なのでサボることも出来ず、沈んだ気持ちのまま制服に着替え登校する準備をしていると、

「夏帆、昨日事なただけだよ」

春兄が部屋の入り口に立ち話しかけてきた、私は思わずビクツと反応してしま
う。

「な、なになな？ 春兄……」

「俺本気だからさ、本気で夏帆のこと好きなんだよ、ふざけて昨日あんなことした訳じゃないから」

「えっ……」

「じゃ学校気をつけて行くんだぞ」

そう言い残して春兄は行ってしまった、私は春兄に告白されたという事実に向かって追いついていなかった。

春兄が私の事を好き？ 兄妹としてじゃなく異性として？ 春兄は私の事を恋愛対象として見ている？ 混乱する頭で必死に考えていると、不意に昨日の出来事を思い出してしまい、顔が赤く火照っていく。

結局混乱したまま学校へ行った、授業はあんまり頭に入ってこず、ずっと春兄に言われた言葉が頭の中をぐるぐる回っていた。

(ど、どうしよう……)

私は春兄をそういう目では見たことがなかった、だが春兄の真剣な想いを聞いて

ているうちにだんだんと意識してしまっている……

だが私たちは血の繋がった兄妹だ、春兄がいくら本気だとしても私が春兄を受け入れることは許されない、かと言って春兄と距離を置ける状況ではない、春兄にどう接していくのか、春兄との関係はこのままで良いのか、答えが出ないまま時間だけが過ぎていった。

放課後になり、いつものように家族ラインに通知が来る今日は千秋がリクエストをくれて、いつも通りスーパーへ行つて材料を買い家に帰り晩御飯の準備をし始める、しばらくして千秋が帰ってきた。

「ただいまー、今日のご飯はなにかな？」

「あ、おかえり、今日はハンバーグだよ、もう少し待ってて」

「やった！ 夏帆姉さんの作る料理大好きなんだよね……夏帆姉さん、なんかあった？ 元気なさそうだけど原因は何？ 学校？ もしかして春兄？」

「ち、違うの！ 春兄とは何も無い！ ただ……」

言える訳ないよね……だって春兄に告白されましたなんて……

「ふーん……春兄抜け駆けしたんだ……」

「え？」

【体験版】配信者の兄と弟との秘め事

発行日 2023年7月27日

著者 野菜箱

<https://www.pixiv.net/member.php?id=6115077>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
